

CARE conference 参加記

大出 晃士[✉]

東京大学 大学院医学系研究科 システムズ薬理

2019年11月18日に、ドイツミュンヘン等で開催された CARE conference に参加させていただきました。学会員の皆様はご承知の通り、ミュンヘン「等」というところが、ポイントです。CARE conference は、ドイツ会場を Hub として、世界各地のサテライト会場を双方向的にオンラインでつなぎ、バーチャル国際会議を行う形式をとります。オープニングトークで Till Roenneberg 博士が、CARE conference は initiative である、と宣言されていました。5G ネットワークと AR が一般化することで、物理的な距離が対面コミュニケーションの障壁とは真の意味で言えなくなる日が、近い将来やってくる機運もあります。このタイミングで、ネットワーク通信を主軸とした国際会議のありようを考える試みに参加できたことに、Martha Merrow 博士をはじめ、主催者の皆様に感謝いたします。

CARE conference の謳う意義の第一には、脱炭素化 (low carbon emission) とあります。国際会議のたびに航空機に何百人も搭乗して大移動するのは、サステナブルでない、ということです。一応、伊丹市出身者として航空機の名誉のために申し上げると、一度に数百人を輸送する旅客機は乗用車に比べて、一人当たりの燃費としては桁違いに悪いわけではありません。そうはいつでも、移動コストは時間的にも少ないに超したことはありませんし、風力などのクリーンエネルギーも移動手段の代替としては実用的ではありません。私は今年になって初めて SDGs の具体的な中身を知った程度のリテラシーの人間ですが、環境に優しい選択は、他の何かにとっても優しい、という側面はあるはずで、こういった試みが悪いはずはありません。

果たして、私は CARE conference の脱炭素化以外の恩恵を、さっそく享受することになります。諸事情により、東京会場に間に合わなかった私は、オープニングの Roenneberg 博士のトークを聞き逃すまいと、まずは自宅から YouTube 経由で CARE conference に“参加”いたしました。そこで少し驚いたのが、思いのほか Live 感を感じた、ということです。実は、私は

YouTube などの動画配信で講演を聴くのがあまり得意ではありません。ところが、CARE conference では、画面の中の会場「内」でのやり取りだけでなく、画面の中の複数の会場「間」が、ネットワーク越しにやり取りしている様子を、YouTube を介してやはりネットワーク越しに視聴することになります。この構造故に、自分もそのライブのやり取りに取り込まれるような感覚が生じるように思いました。おそらく、YouTube で視聴しながら、Twitter で質問をされていた先生方は、さらに双方向性のやり取りに没入できたのだろうと想像します。いずれにせよ、CARE conference フォーマットのおかげで、私はオープニングセッションを逃さずに済みました。

さて、その後私は、東京会場に移動し、以降は最後まで物理的に CARE conference に参加いたしました。いくつかのトークが質量分析計を用いた、メタボロミクスあるいはプロテオミクス解析手法を駆使していました。私も質量分析計を使い始めて、8年余りになりますが、オミクス解析というのは一歩間違えると、記述的なものに留まり、結局よくわからない、という状態に陥ります。特に、次世代シークエンサーのように、ある程度の網羅性が確保されている手法と異なり、質量分析の網羅解析は、基本的には検出しやすいものを検出しているに過ぎない、という限界があります。しかし、CARE conference でのプロテオミクス・メタボロミクスは、巧妙な genetic perturbation との組み合わせで、単なる分子変動の記述ではなく、それが何によって惹起されているのか、に迫るものであったり、プロテオミクスレベルの振動成分の有無から、タンパク質集団全体のリン酸化修飾状態が変動していることを示すものであったり、まさに、「オミックスとはかくあるべし」といった研究内容でした。自らもそうありたい、と、刺激を受けました。

東京会場の CARE conference は、非常にアットホームな雰囲気でした。海外の学会で、日本人研究者同士の交流がむしろ活性化する、という現象が (功罪があ

[✉] kojiode@m.u-tokyo.ac.jp

ると思いますが) しばしば生じ、貴重な機会となっています。遅れて会場入りした私は、東京会場は国際会議に“東京チーム”として臨んでいる、といった団結感を感じ、まさに、海外の学会で生じるローカルな交流の場となりそうでした。この雰囲気は、国内で小さなシンポジウムを開いたとしても、醸成することは難しいのではないかと思います。東大理学部1号館東棟279号室には確かに“国際学会的な何か”が息づいていました。

プレナリーレクチャーでPaolo Sassone-Corsi博士が「この手の試みは、たいてい失敗するが、どういうわけか今回はワークしている」と冗談めかして言われていました。ひとえに準備に携わってくださった皆様のおかげであります。まず、カメラワークや画面の切り替え、など、オンライン配信がプロの仕事でした(おそらくプロフェッショナルなスタッフが多数入っていたのではないのでしょうか)。各会場とTwitterをつないでいく、Merrow博士の気配りと、ドイツ会場スタッフの連携も素晴らしい。これらはやはり重要で、ストレスなく講演を聴けるというのは、会議の基盤だと思います。さらに、画質・音質・時間差の少なさ、など、双方向コミュニケーションにも、少なくとも東京

会場では全く違和感がありませんでした。こういった設備を整えてくださった、深田先生、深田研究室の皆様、改めて感謝いたします。同時に、会議に耐える通信設備が利用できる教室を、深田研究室の皆様が苦勞して探されていたことを、私は少し知っておりますので、どこでもこういった会議ができるような環境を、やはり大きな大学は率先して整備していただきたいと思います。

最後に、この initiative は成功であったか、という点ですが、参加した者としては、大成功であった、と思います。しかし、これを大きな流れとするには、サテライト会場側の工夫も必要だとも感じました。先に述べたように、東京会場では、(少なくとも私には)「国際学会的な何か」が醸成されました。これを利用して、例えば、CARE形式とジョイントする形で、国内イベントを行う、というようなことも考えられます。海外学会でむしろローカルな集団の交流が深まるという功罪の、「功」を抽出するような試みができるかもしれません。あるいはサテライト会場同士の交流というのは、新しいコミュニケーションを生むようにも思います。次回の CARE conference が、どのような形式をとるのか、非常に楽しみな試みでした。

